世界文学名著选集
3

二反長半作品集

3

民話

集英社

二反長半作品集　第三巻　「民話」
昭和五十四年七月五日　第一刷発行

著者　二反長半
発行者　堀内末男
印刷　大文堂印刷株式会社
　　株式会社美松堂印刷所
製本　株式会社石橋製本工場
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十
郵便番号一〇一
販売部　東京二三八局二七八一番
出版部　東京二三〇局六三五一番
著作権継承者の了解により検印廃止いたします。
落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

© 1979 Printed in Japan
0395—173003—3041

凡例

▽本作品集は、童話を一巻、少年小説を一巻、民話を一巻にまとめ、全三巻とした。

▽本作品集の編集にあたっては、著者の意志を尊重し、底本は初筆原稿作品を採らず、可及的に著者が新しく更訂を加えた単行本より採用した。

▽本作品集掲載の作品選定にあたっては、編集委員会において決定した。

▽作品発表後の著者による加筆、削除、訂正、文字調整などは、つとめてこれを活かした。

《童話について》

▽配列は初出誌紙不明の場合が多いため、単行本として最初に発表された年代順に並べた。なお同時期刊行の作品については、五十音順に配列した。

▽旧かな、旧漢字は、現代かなづかい、新漢字に改めた。また原則として、分かち書きを廃止した。

▽改題作品は、底本通りのタイトルとし、文末に旧題を示した。

《少年小説について》

▽配列は、単行本として最初に発表された年代順に並べた。

▽用字用語については、童話作品に準じた。
▽改題作品は、底本通りのタイトルとし、文末に旧題を示した。

《民話について》
▽配列は、北海道から沖縄まで、地域順に収録した。
▽出典に関しては、巻末に一覧表を付した。
▽用字用語については、童話作品に準じた。
▽原話者のある作品は、原話者名を文末に示した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第三卷目次

凡例　一
みどりの御殿　二三
ひばりのお使い　二八
こどもに負けたおとな　三〇
米代川のすてられうば　三三
笠地蔵さま　三五
海の水はなぜからい　三九
さる地蔵　三六
木仏長者　三九
こんびの太郎　四三
上の爺と下の爺　四九
かもうち三太　五四

あばれ絵馬　三三
民部さまぎつね　三五
高篠のわらび長者　三六
きつねと人形しばい　三八
ふしぎな舞いおうぎ　三九
きつねが正一位　四三
手白ざるの温泉　四六
たんすのたんぼ　四八
たぬきおしょう　四九
福はうち、鬼はそと　五〇
ねずみの浄土　五一
いもほり長者　五四
大力の小太郎　五六

"どうも"と"こうも" 一〇〇
母子草ばなし 一〇四
天にのぼった源五郎 一〇七
かんのんさまの片もも肉 一一〇
鬼笛の話 一一三
舞茸の話 一一六
丹波のほら男 一一八
天狗の花 一一九
ネコ山の三毛ネコひめ 一二四
大阪のあわてもん 一二六
かみなりがへそをとる話 一三三
ほうき売りと土人形 一三四
みむらん坊主の話 一三八

葛の葉ぎつね　一四〇
のらくらとらやんの大旅行　一五二
泥棒の損　一五七
猿の恩がえし　一六〇
はす池へ帰った娘　一六一
銭になった鹿　一六四
船の中の角力とり　一六七
すっぽんと川魚商人　一六九
油揚食いのお嫁さん　一七二
盗人をなおす医者　一七四
牡丹の花とねずみ　一七六
梅干となった鬼の話　一七九
中将姫ものがたり　一八一

ちゃっくりかきふ　一八五
長者の庭のすもうとり　一八七
ふえをふくわかもの　一八九
みかんの中の仙人　一九二
平生ぎつねのしくじり　一九五
馬にされた旅人　一九八
ほうらく売りの出世　二〇二
おこった人形たち　二〇七
ふたつの一升ます　二一〇
おどりがにの話　二一四
人魚塚　二一八
三つの難題と兄弟　二二〇
たにしときつねの競走　二二二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五郎のおきあがり小法師　三五
北谷村の親友　三九
小牛になった花よめ　三三
たいをたすけた男　三六
解説　編集委員会　二四〇
年譜　二四九

編集委員　石森延男
久保　喬
土家由岐雄

装丁　舟橋菊男

二反長半作品集

第三巻

みどりの御殿（ごてん）

白いひげの老人

むかし、大きな山のふもとのコタン（村）に、いままで見たこともない、白いひげをはやした老人が、ひょっこりとあらわれて、まことにふしぎなことをふれ歩きました。

「おまえさんたちは、この裏山の奥には、魔物（まもの）がすんでいるといって、だれひとりのぼらないが、それどころか、裏山には、すみきったみどりの泉があって、美しいゆりの花が、いちめんにさいているのじゃ。しかも、その花をもっているものは、どんなねがいごとでもかなって、たいへんな幸福者になるのじゃ。」

しかし、コタンのものは、だれひとり、老人の話を信じようとはしませんでした。

「あの老人め、気でもくるっているにちがいない。そんなばかなことがあるものか。わしたちは祖先から、裏山には、おそろしい魔物がすんでおる。ちかづくなと、おしえられてきたのじゃからな。」

そういって、老人を笑いものにしました。

しかし、その中で、たったひとりコタンでも評判の、心のやさしいむすめだけは、老人の話を聞くと、ぜひ、その裏山へいってみたいと思いました。

「世のなかには、いろいろとふしぎなことがあるというもの。それに、そんな幸福がえられるというのなら、ぜひいってみたい。」

むすめは、あくる日の朝早く、ひとりでコタンをたって、裏山へつうじる道へと、わけいりました。

道はすぐになくなりました。あとは、だいたいの方角をさだめて、しげみをかきわけてすすむほかはありません。それでも、むすめは上へ上へとのぼっていきました。

そして、ようやく頂上へのぼりつめて、裏山にはいったとたんに、あたりのけしきは一変（いっぺん）しました。

見わたすかぎり、一面の花ざかりで赤、青、黄色と、

色とりどりの花がさきみだれ、花のかおりが、むせるようにただよっています。

「まあ、なんという美しいお花畑。」

むすめは、むちゅうで花をつみはじめ、うでいっぱいに、もうこれ以上もつこともできないほどつみとりました。そして、花のかおりで、夢みるようなここちになり、歌をうたいながら、ぴょんぴょんと、お花畑の中を、奥へ奥へとすすんでいきました。

やがて、お花畑にも夕やみがせまってきました。きゅうにあたりがくらくなったので、おやっと思って空を見あげると、太陽は、赤い夕やけ雲をぽつんとひとつのこして、しずんでいくところでした。

むすめは、きゅうに、心ぼそくなってきました。そのとき、ふと老人がいっていた、泉のそばの幸福のゆりの花のことを思いだしました。

「そうだわ、わたしは、ゆりの花をとりにきたのだったわ。いまのうちに、みどりの泉をさがさなきゃ。」

勇気をだして、どんどんすすんでいくと、花畑をすぎて、まもなく小鳥がさえずっている林になり、それをぬけると、こんどはひろい野原へでました。だが、もうすっかり夜になって、道も見えません。

「ああ、やっぱり、わたしがばかだったのかしら。みどりの泉なんて、やっぱりないんだわ。」

むすめは、うでにかかえていた花をなげすてると、そのばにうつぶして、どっと泣きだしてしまいました。

あたたかかった風も、いつか身をきるようなつめたい風にかわりました。

「ああ、やっぱり、裏山には、魔物がすんでいるんだわ。わたしは、このまま魔物にころされてしまうんだわ。」

と、思ったとき、いままでくらかった空が、ぼうっと明るくなって、月がでてきました。

「あら、お月さまがでてきたわ。お月さま、ありがとう。これで道もわかるから帰れるわ。」

むすめは、思わず月にむかって、れいをいいました。

すると、その月光の中を、どこからか、きれいな笛の音がひびいてきました。

むすめはうっとりとして、しらずしらず、笛の音にひかれて、音のするほうへ歩きだしていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com